

佐賀県研究成果情報（作成 2021 年 2 月）

[情報名] チャ炭疽病に対する保護殺菌剤と浸透性殺菌剤混用散布による防除回数の削減

[要約] 秋芽生育期のチャ炭疽病に対して保護殺菌剤（ダコニール 1000）と浸透性殺菌剤（QoI 剤または DMI 剤）の 2 ～ 3 葉期の混用散布は、萌芽期～1 葉期の保護殺菌剤と追加防除の慣行体系と比べ同等の効果を示し、散布回数が削減できる。

[キーワード] チャ、炭疽病、QoI 剤、DMI 剤

[担当] 佐賀県茶業試験場 茶樹研究担当

[連絡先] T E L : 0954-42-0066 ・メールアドレス : chagyoushiken@pref.saga.lg.jp

[分類] 普及

[部会名] 茶業専門部会

[専門] 病害虫

[背景・ねらい]

茶の炭疽病は、秋芽の生育期に降雨が続くと感染し、その後発生量が多く被害が拡大すると母葉の充実が不十分となり、翌年の一番茶が減収する。感染は、開葉初期にあたるため、通常秋芽の萌芽～1 葉期に保護殺菌剤を散布し、3～4 葉期に 1～2 回の追加散布を行う体系防除が指導されている（佐賀県防除のてびき）。この時期は、茶の展開スピードが速く、防除適期が短くなり、さらに降雨等の影響により追加の散布を逸することが多い。そこで、2～4 葉期における保護殺菌剤と浸透性殺菌剤（QoI 剤、DMI 剤）の混用散布の防除効果と散布回数の削減を検討する。

[成果の内容]

1．秋芽生育期のチャ炭疽病に対し、保護殺菌剤（ダコニール 1000 700 倍）と浸透性殺菌剤（QoI 剤：スクレアフロアブル 2,000 倍、DMI 剤：オンリーワンフロアブル 2,000 倍）の 2～3 葉期の混用散布は、1 葉期に保護殺菌剤を散布し、3 葉期に浸透性殺菌剤を散布する慣行体系防除と比べ、高い防除効果を示す(表 1)。

2．本混用散布により、散布回数が削減できる。

[成果の活用面・留意点]

1．県内全域の茶生産地で活用できる。

2．新梢枯死症の防除時期と重なるため、同時防除が可能である。

4．浸透性殺菌剤の QoI 剤、DMI 剤に保護殺菌剤を混用することで、薬剤抵抗性発達リスクが軽減される。

[具体的なデータ]

表1 チャ炭疽病に対する保護殺菌剤と浸透性殺菌剤混用散布の防除効果

区名	散布時期			調査時期				
	萌芽～1葉期 (7/29)	2～3葉期 (8/5)	3～4葉期 (8/12)	処理前 発病葉数	21日後(9/2) 発病葉数 防除値		28日後(9/9) 発病葉数 防除値	
保護殺菌剤 + QoI 剤混用	ダニール 1000 + スクレアフロアブル (700倍) (2,000倍)			1.3	38.1	69.0	40.6	74.5
保護殺菌剤 + DMI 剤混用	ダニール 1000 + オリワンフロアブル (700倍) (2,000倍)			2.5	43.3	64.8	48.6	68.0
対 照	ダニール 1000 (700倍)	オリワンフロアブル (2,000倍)		1.8	55.9	54.6	57.7	60.7
無処理				1.0	123.0		132.8	

品種は「さやまかおり」、1区 4.0 m² 3 反復、200ℓ/10a 相当の薬量を背負い式動力散布機で散布した。

[その他]

研究課題名：九州病害虫防除推進協議会茶樹連絡試験

予算区分：受託

研究期間：2020 年

研究担当者：山口史子・野村幸代・平野剛史